



己の事を究明する

とある会合先で「どちらさまですか？」と声をかけられたら、大概の人は名刺を取り出して、「私は、○○の○○です」と、所属先と氏名を名乗るのではないだろうか。

「大きい」と予想だにしない注文がついたとしたら、返答に窮して「私は、悪い人ではありません」とでも言うのだろうか。

なかには「どうしたら人として立派な生き方ができるのか」「何をもってわが人生の集大成とする

ともなく、目的や意識を持ってないまま毎日を繰り返してきたという生き方の人もいる。

人の心は面の如し。名が、そのものの本質を表しているもの。本質に名が相応しいもの、このことを名詮自性(名詮は、その名に備わっている。自性は、そのものの本質のこと)という。

「あなたは誰ですか？」と問われて、何の疑いも持たずに「私は○○です」と、名前のみを答え続けてきた人は少なくない。

禅語の己事究明(己の事を究明すること)には、「自分に真正面から向き合う」という意がある。

「自分を知る」や「自分を見つめる」ことは生やさしいことではないものの、一人ひとりが己事究明の心がけを怠ってはなるまい。

「頭のなかでは、わかったつもりでいる」と思い込んでいただけでは、相手には何も伝わらない。

退歩就己

自分のことを立ち止まって考える暇もなく、毎日を目まぐるしく過ごしてはいないだろうか。

ある日突然、人生の途上において思わぬ出来事に遭遇したことが

ら、自分という存在を問われてしまった、という体験をした。それまで外に向いていた関心の舵取りは、自身の内面に向かって大きな方向転換が求められた。

自らの心が砕け散りそうな勢いで揺すぶられ、その場から雲隠れしたくなるような一大事に直面したなら、どうするだろうか。

こうした事態を千載一遇*1の好機ととらえることができる人の姿勢を中国の箴言では退歩就己(歩を退いて己れに就く)と説く。

自らがつくり上げた自分は、自らがつくり直せる自分でもある。この4〜5年、塾生の法人設立10周年等の祝賀行事に足を運ぶことが増えている。「歩を退いて己れに就く」と、10年間を振り返る大仕事ときだ。

「私たち(の法人)とはいったい何者か？」と、新たな10年の第一歩を踏み出すにあたって自問自答のための良き機会ととらえたい。

「迷う者は道を問わず」
「迷わんよりは問え」

今年度の会議は、定番になりつつある他己紹介*2に己事究明と退歩就己を加えてみた。退歩就己は、脚下照顧*3のなかに潜んでいる。

 転期に立つ経営の視座④
 歩を退いて己れに就く

もし、名刺が不要な場所と同様に問いかけられたら、「○○と申します」と、名前を伝える程度かもしれない。仮に自己紹介を求められたとしたら、出身地や趣味に加えて自らをアピールする材料を添えて話すこともあり得るだろう。

「名前を省いて自らを紹介してくのか」といった課題を取り上げ、「人生の課題と真正面から取り組んで生きている者です」と、私心をメッセージのように託して紹介する人もいるだろう。

日々そのようにして生きている人であることが窺われる。そうしたことに心をとめて深く考えるこ

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。『介護ビジョン』編集委員。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『99の言葉の杖』(日本医療企画)、『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

<http://www.hayakawa-planning.com>

ブログ: <http://ameblo.jp/hayakawa-planning/>

*1: 『99の言葉の杖』(日本医療企画、182~183頁)参照

*2: 2014年10月号本稿参照

*3: 『99の言葉の杖』(日本医療企画、172~173頁)参照